

2025年『撰集抄』読解解説

《緑は単語、青は文法、紫は古文常識》

みむろと

高 貴 な

昔、御室戸の法印隆明といふ、**やんごとなき**智者、

中国（唐土）

意志

もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、

はりま

係助詞

くでいらつしやる

播磨の明石といふ所になん住みていまそかりける

驚き呆れる（ほど）

存続

同格

連体形

に、^ア**あさましくやつれたる僧の**、来たりて物を乞ふ

侍り。

〔注〕○御室戸——現在の京都府宇治市にある三室戸寺。

みむろとじ

・「法印」は僧位の最高位。僧の官職では「僧正」にあたる。

そうじよう

・「唐土」は中国の古い呼び名。僧が中国に渡るのは、仏教の教義をさらに極めるため。

・「もろこしに渡り給はん」の「給ふ」は隆明の心内文で一人称ではあるが、筆者から隆明への敬意。天皇以外は基本的に自敬敬語にはならない。

・「やつる」は「（他動詞）やつす」の自動詞。へ①目立たない「粗末な・質素な」服装「様子」になる ②（病気などで）みすばらしくなる。ここでは後に貧乏であることがわかるので、「みすばらしい」と訳す。なお、「質素」だと（本当はお金があるけれど）慎ましくしていることもあるので不適切。

訳：昔、御室戸寺の法印隆明という、尊い高僧が、「中国に渡ろう」と思いなさて、西の国に向かい、播磨の明石という所に滞在していらつしやった時に、驚き呆れるほどみすばらしい格好をしている僧で、やって来て物乞いをする僧がおります。

まったくのあかはだか

さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。

しりさき

連体形終止

人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。

・「さながら」は通常、打消しを伴う場合に「まったく」となるが、ここでは何も着ていないことが打消しとなる。

・「赤裸」の「赤」は「すつかり」の意味。「赤裸々」^{せきらら}と同じ。

○ゑのこー子犬。

・「なぶ」は古語では「(植物などを)靡^{なび}かせる」だが、ここでは現代語での「なぶる(面白がっていじめ、苦しめる。愚弄する)」の意味。

・「ける」は連体形終止。鎌倉時代の作品なので、現代語同じで普通の終止と同じだとみなしてよい。

訳:まったくの丸裸で、子犬を脇に抱えています。周りの人々は、前後に立って笑ったり冷やかしたりした。

おぼ

きよみづでら

「あやしの者や」^{おぼ}と思して見給へば、清水寺の

あり + 敬意

宝日上人にいまそかりける。

・(大学受験レベルを超えるので参考までに)「あやしの者や」の「や」は詠嘆。

「形容詞語幹(シク活用だと終止形) + の + 名詞 + や」で「(形容詞)な(名詞)だなあ」。例)をかしの御髪や。(訳:きれいな御髪だなあ)『源氏物語』

しよつにん

・「上人」はすぐれた知徳を備えている高僧。また、高僧の敬称。

・「いまそかり」は「あり + 敬意」の「いらっしゃる」。

丸裸の乞食にこれまで敬語は使われていなかったが、隆明が「宝日上人」だと気付いた箇所から、作者も彼に敬語を使っている。

訳:(隆明が)「不審な者だなあ」とお思いになってご覧になると、(なんと)清水寺の宝日上人でいらっしゃった。

「イ **ひが目にや**」とよく見給へど、**さ**ながらまがふ

当然(はず)

自発

べくもあらざりければ、^ウ**かきくらさるる**心地し

て、伏しまろびて、「あれはめづらかなる**わざ**かな」

とのたまはせければ、

・「ひが目にや」は隆明の心内文。「あらむ」が省略されている。

・「かきくらす(掻き暗す)」はへ①(雨雲などで)辺り一面を暗くする ②心が沈む・悲しみにくれる。ここでは心情なので②。

・「あれ」は遠称の代名詞だが、少し離れたものを指すこともある。

ここでは目の前なので「これ」の方が適切だが、心理的に遠く感じて「あれ」と言ったのかもしれない。

・「わざ」はへ①法事・葬儀 ②行為・行い ③事態・様子など。ここでは③。

・「のたまはす(宣はす)」はおっしゃる。「言う」の尊敬語。

「のたまふ(宣ふ)の未然形+尊敬の助動詞「す」が一語になったもの。

訳:「見間違いだろうか」とよく(目を凝らして)ご覧になるけれども、まさしく間違はずもなく(宝日上人)その人だったので、(隆明は)自然と悲しみに心が暗くなる感じがして、(その場に)倒れ伏して、「これは滅多にない事態であることよ」と仰ったところ、

上人ほほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」と

断定

て、走り出で給ふめるを、人あまたして、

視覚的推定

大勢　　で・ゝを使って

過去

取りとどめ奉らんとし侍りけれども、

こぐら

連体修飾

完了　　ので

さばかり木暗き繁みが　中に入り給ひぬれば、

どうしようもない

エ　力なくやみ侍りけり。

・「物に狂ふ」は「物狂い」という現代語があるように、正気を失っている・乱心。なお、「物」は元々「物の怪」で、「物の怪につかれる」の意味から。

・本当に狂っている人は自分で自分を客観的に狂っているとは言わないでしょうから、ここで実は狂人を演じていることが匂わされています。

・「侍るなり」の「なり」は「ラ変動詞の連体形(侍る)」に接続しているので文法的には断定と伝聞・推定の見分けは付かないが、一人称なので断定。

・「人あまたして」の格助詞「して」は〈①ゝで(手段・方法) ②ゝとともにゝで(共同) ③ゝを使ってゝに命じて(使役の対象)〉。ここでは②と③の解釈が考えられる。隆明に依頼されなければ、人々は乞食だと思っている人をわざわざ引き留めないはずなので、依頼(命令?)していると思われる。

ただ、隆明自身も一緒に引き留めているはずなので、③共同で訳すのも自然。なお、③は現代語にも「みんなして責め立てる」の形で残っている。

・「さばかり(然許り)」は〈①それほど ②非常に・とても〉。ここでは②。
・「やみ」は「やめ(下二段:他動詞)」ではなく「やみ(四段:自動詞)」。

訳:上人は笑って、「本当に気が狂っておるのです」と仰って、走り出していらっしやるように見えるのを、大勢の人で、引き留め申し上げようと思したけれども、(上人は)木々のとても暗い茂みの中にお入りになってしまったので、仕方がなく、(追いかけるのは)中止になりました。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひ

て、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く

尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えず

四段動詞

完了直接過去

なり給ひにき。

・「すべき方なし」は「なすべき方法がない・どうしようもない」。同様に「どうしようもない」となる、諦めの場面で登場する語は以下の通り。

為^せむ方^{かた}無し・為^すべき方無し・術^{すべ}無し・詮^{せん}無し（詮^{せん}方法） ※なすべき方法がない
言^いふ甲^が斐^ひ無し ※言っても仕方がない

如何^{いか}はせむ・如何^{いか}にせむ（反語）※どうしようか、いや、どうしようもない

敢^あへ無し（敢^あふ^ふこ^こら^える）・力^{ちから}無し・え^え避^さらず・避^さらぬ ※できない

遣^やらむ方無し・遣^やる方無し（遣^やる^{こと}不快な気持ち晴らす）※心を晴らせない

わりなし（理^{ことわり}のわり）・是非に及ばず（是非^{ことわり}道理）

・「またも」は「二度と（は）」の意味。漢文の部分否定のような表現。

・「見ゆ」は①見られる ②見える ③結婚する^ゝなど。

ここでは「①見られる」か「現れる・姿を現す」。

なお、元々「ゆ」は奈良時代（上代）の助動詞で受身・可能・自発の意味。

（文法書にも載っていることが多いので、『体系古典文法』『完全マスター古典文法』などをお持ちの方は確認しましょう。）

・「ずなり」の「なり」は助動詞ではなく四段動詞。

（もし助動詞なら、「ず」はラ変型の「ざる」になる）

訳：隆明法印は、度を超してどうしようもなく悲しく感じなされて、（他に）これという理由や目的もなく、その里に留まりなされて、（上人の行方を）広く捜し求めなさるけれども、その後は二度と（上人は）見られなくなりなされた。

そこで

存続

さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりけれ

格助詞

受身

ば、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みて

だけ

も二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。

・「さて」は副詞だと古文単語帳にも載るへ①そのまま・そうして ②その他

(「さての」「さては」等の形で)。

ここでは副詞だと文脈に合わないので、接続助詞なので、「そこで」。

・副助詞「ばかり」はへ①ほど(程度)・②だけ・ゝにすぎない(限定)。

ここでは上人のことを聞かれた村人が「彼のことはよくわからない」という返事の中なので、②。但し、厳密に二十日ではなく約二十日という意味だろうから、「ほど」の意味もあるはず。

訳:そこで(隆明は)里の者に詳しく事情を尋ねなさっていたところ、「どこの者とも人々に知られないで、この村に住み始めても二十日(ほど)に過ぎない」という回答でございました。

オ この事、限りなくあはれに覚え侍り。

なるほど

推定 逆接

何と、げに「世を捨つ」といふめれど、身のあるほど

畏れ多い・立派だ

は、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこく

も覚え侍るかな。

・「覚え侍り」の主語は設問(三)にあるように作者(語り手)。

なお、もし隆明であれば「覚え給ふ。」などの敬語が加わるはず。

・「げに」は「なるほど・確かに。本当に」。他者の言動や知識に対して、納得して感動していることが多いが、ここでは逆接の前なので「確かに」という譲歩。

・「世を捨つ」は「出家する」。他にも同じ意味の表現は「厭ふ・家を出づ・飾り

かしら

を下ろす・頭下ろす・形変はる・形を変ふ・髪を下ろす・様変はる・様変ふ・

やつ

削ぎ棄つ・背く・入道す・御髪下ろす・身を捨つ・(身を)俏す・世を去る・世

のが

を捨つ・世を背く・世を遁る・世を離る」など。

か

訳この出来事は、この上なくしみじみと心動かされる気がします。

なんとまあ、確かに(出家は)「世を捨てる」と表現するようだけれども、

(そうはいつでもやはり)生きているうちは、(せめて)衣服は捨てないもの

でございますのに、(衣服まで捨てなされた上人は)しみじみと心動かさ

れ、立派にも思われますなあ。

おおかた・だいたい

係助詞

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなん

サ変

存続

し給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄り

がふし

係助詞

て、合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ

わざ

給ふこと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし

視覚推定

ひとかた

給ふ時も侍るめり。一方ならずぞ見え給ひし。

・「よろづ(万)」は名詞だとへ①様々 ②万事ゝなどで、

副詞だと「何事につけても」。ここは「よろづの」などではないので副詞。

・「し給へりけるなり。」の「なり」は、直前がう変型の連体形なので、文法的には断定も伝聞・推定もありうる。

文脈的にも語り手の字の文で、両方とも解釈しうる。

○合子―ふた付きの容器。

たくはつ

きようもん

・「合子」は食器としてのほか、托鉢(Ⅱ修行僧が経文を唱えながら市中を歩い

ほぐこ

たり人家を訪問し、施しの米や金銭を受けて回ること。)にも利用された。

訳：おおかた、この上人は、何事につけても正気を失ったような(常識から外れた)行動をなさっていたという。

ある時は、清水の滝の下に立ち寄って、合子「Ⅱふた付きの容器」という物に水を入れて、陰部を洗いなさることが、日常的な行為であった。(また、)非常に静かに余念をまじえず(仏道に)心を澄ましなさる時もあるようです。並一通りの僧ではなく見えなさいました。

澄み渡る心の内は、いつも同じさきらなれども、外の

もも

振る舞ひは百に変はりけるは、^カよしなき人の思ひ

断定疑問

を、我のみ一方にはとどめじ』と思しけるにや。

・補助動詞「わたる」は時間または空間的な広がりを表す。「澄み渡る」は

「(月や空・水などが)一面に曇りなく澄む」と空間的な広がりを表すことが多い表現。ここでは心の空間で解釈できる。二文前に「思ひ澄まし」とあるように、余念をまじえず仏道に専念している。

○さきら―才知。

・「心の内」と「外」は対比になっているので、内面と外面。

・「百に変はり」は常識とは異なるという意味で「変わっている」というよりも、内面が「いつも」同じに対し、外面は「百に変わる」なので「変化」。

清水の滝で合子を使って陰部を洗うという変な行為を行ったり、非常に静かに精神統一していたりの変化を指すのでしよう。

・「よしなし(由無し)」はへ①つまらない・取るに足らない ②関係がない

③方法がない ④理由がないなど。

人を修飾する場合、①②が多く、ここでは①で凡人・俗人を指す。

ひとかた

・「一方」は形容動詞だと「並一通りなさま」だが、

ここでは名詞(十格助詞)なので「一人(の方)」。ひとりほう

訳: 仏道に専念し切っている心の内側は、常に同じ才能と知恵を持っているけれども、外見上のふるまいが数多く変化していたのは、「取るに足らない(平凡な)人々からの(尊敬の)念を、自分だけ一人には受けないようにしよう」とお思いになったのだろうか。

なかの

こも

あかつきがた

て、**暁方**に千鳥の鳴くを聞き給ひて、

○中関白―藤原道隆。

・藤原兼家の第一子で、道長の兄。

ていし

『枕草子』の作者である清少納言が仕えた定子〔一条天皇后〕の父親。

これちか

摂政・関白となったが、死を前にして子伊周に地位を譲ろうとして果たせず、道長に権勢を奪われた。

めいにち

ほうえ

・「御忌（ぎよき）」は高貴な人の年忌〔「命日」の法会の敬称。

○法興院―藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。

・「法興院」は「ほこいん」や「ほうこういん」と読む。

・（参考までに。）兼家は『蜻蛉日記』（藤原道綱母著）に出てくる夫。

・「暁方」は夜明け前のまだ暗いころ。未明。

訳：この上人（こそ、その人）だよ、藤原道隆の追善供養の日に、法興院に籠つて、夜明け前頃に千鳥が鳴く声を聞きなさつて、

キ
明けぬなり／賀茂の河原に／千鳥鳴く

今日もはかなく／暮れんとぞする

完了

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。

・「明けぬなり」の「明け」が下二段活用で未然形・連用形が同じ。よって、「ぬなり」が「完了・強意＋伝聞・推定」か「打消＋断定」かは文脈判断。
 ここでは結句に「暮れ」があり、既に夜が明けるタイミングのはずなので前者。
 ・鳥の鳴き声で夜明けに気づくことは古文あるあるなので、「なり」が聴覚的な推定であることも合致する。

・「んとぞする」は「んとす」に強調の係助詞「ぞ」が加わって係り結びになっている。「んとす」は元々「むとす」で、「うようとする」「うことだろう」。

・「はかなし」はへ①頼りない ②ちよつとした ③あっけない。

ここでは時間の短さなので③。

・慣用表現「はかなくなる」は死を表す。この歌も、

○『拾遺集』―三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、ほぼ同じ歌が「円松（または円昭）法師」作として載る。

訳：夜が明けたようだ。賀茂の河原で千鳥が鳴いている。

今日も（また）あっけなく日が暮れようとしている

と詠んで、（その歌が）『拾遺和歌集』に収録されなされた。

完了 即時

強意

明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思は

自発

完了

断定

れ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印

と載りて侍るは、上人の事にこそ。

・格助詞「より」はここでは即時「くやいなや」するとすぐに」の用法。

・文末の「にこそ」は「あらめ」が省略されている。

・一日が早く過ぎると感じるのは無常観。

訳：夜が明けたらすぐに、あつけなく日が暮れてしまうにちがいないこと「無常」を、以前から自然と悟っていらっしやたのだろう。

あの『拾遺集』には円松法印として載っておりますのは、この上人のことである。

2025年『撰集抄』現代語訳

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、
昔、御室戸寺の 法印隆明という、 尊い高僧が、

もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、
「中国に 渡ろう」と思いなされて、 西の国に 向かい、

播磨の明石といふ所になん住みていまそかりける
播磨の明石 という所に 滞在していらしやる時に、

に、^アあさましくやつれたる僧の、来たりて物を乞ふ
驚き呆れるほど みずばらしい格好をした僧で、 やって来て 物乞いをする僧が

侍り。さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。
おります。 まったく 裸同然の姿で、 子犬を 脇に抱えています。

人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと
周りの人々は、前後に立って、 笑ったり冷やかしたりした。 (隆明は)「不審な者か」と

思ひて見給へば、清水寺の宝日上人にていまそかり
お思いになつてご覧になると、 (なんと)清水寺の 宝日上人で いらつしやつたのだ。

ける。ひが目にやとよく見給へど、さながらまがふ
「見間違ひであるのだろうか」とよく(目を凝らして)ご覧になるけれども、まさしく間違ひ

べくもあらざりければ、ウかきくらさるる心地して、
はずもなく(宝日上人)その人だったので、 (隆明は)自然と悲しみに心が暗くなる感じがして、

伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」と
(その場に)倒れ伏して、 「これは 滅多にない 事態であることよ」と

のたまはせければ、上人ほほゑみて、「まことに物に
仰つたところ、 上人は笑つて、 「本当に

狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまた
気が狂つておるのです」 と仰つて、 走り出ていらつしやるように 見えるのを、 大勢の人を(隆明が)

して、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、
使つて、 引き留め 申し上げようと思いますけれども、

さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、
(上人は)木々がとても生い茂る中に お入りになつてしたので、

エ
力なくやみ侍りけり。

仕方がなく、(追いかけるのは)中止になりました。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひ
隆明法印は、 甚だしく どうしようもなく 悲しく感じなされて、

て、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く
(他に)これという理由や目的もなく、その里に 留まりなされて、 (上人の行方を)広く

尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えず
探し求めなざる けれども、 その後は 二度と(上人は)見られ

なり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を
なさらなかった。 そこで(隆明)は里の者に 詳しく 事情を

問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、
尋ねなされたところ、 「どこの者とも 人々に知られないで、

この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍り
この村に 住み始めて 二十日 ほどです」 という回答でございました。

ける。オこの事、限りなくあはれに覚え侍り。
この出来事は、 この上なく しみじみと心動かされる気がします。

何と、げに世を捨てといふめれど、身のあるほどは、
なんとまあ、確かに(出家は)「世を捨てる」と表現しますけれども、(そうはいつてもやはり)生きているうちは、
着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしくくも
(せめて)衣服は捨てないものでございしますのに、(衣服まで捨てなされた上人は)しみじみと心動かされ、立派に
覚え侍るかな。
も思われますなあ。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし
おおかた、 この上人は、 様々な 正気を失ったような(常識から外れた)行動を
給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、
しなざっていたという。 ある時は、 清水の 滝の下に立ち寄って、

合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふ
合子「川ふた付きの容器」という物に水を入れて、
陰部を
洗いなさる

こと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ
ことが、
日常的な行為であった。
(また)非常に
静かに余念をまじえず心を澄ましなさる

時も侍るめり。一方ならずぞ見え給ひし。澄み渡る
時もあるようです。
並一通りの僧ではなく
見えなさいました。
澄み切った

心の内は、いつも同じさきならなれども、外の振る舞ひ
心の内側は、
常に
同じ才能と知恵を持っているけれども、
外見上のふるまひは、

は百に変はりけるは、カよしなき人の思ひを、我のみ
数多く(常識とは)変わっていたのは、
「取るに足らない(平凡な)人々からの(尊敬の)念を、自分一人

一方にはとどめじと思しけるにや。
にだけは受けないようにしよう
とお思いになったのだろうか。

この上人ぞかし、中関白の御忌に、法興院に籠り
この上人こそが、
藤原道隆の追善供養の日に、
法興院に籠って、

て、暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、
夜明け前頃に
千鳥が
鳴く声を
聞きなされて、

キ
明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く
夜が明けたようだ。
賀茂の河原で
千鳥が鳴いている。

今日もはかなく暮れんとぞする
今日も(また)あつけなく
日が暮れようとしている

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。
と詠んで、
『拾遺和歌集』に
(その歌が)収録されなされた。

明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思は
夜が明けたらすぐに、
あつけなく
日が暮れてしまふにちがいないことが、以前から自然と悟って

れ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印
いらつしゃたのだらう。
あの
『拾遺集』
には
円松法印

と載りて侍るは、上人の事にこそ。
として載っておりますのは、
この上人のことである。